# リサイクル燃料備蓄センター建設に係る 環境保全への取り組み状況について



R「S リサイクル燃料貯蔵

# 環境保全への取り組み

当社は、平成20年3月より、「リサイクル燃料備蓄センター」の準備工事を進めており、現在のところ、順調に進捗しております。

工事の実施に際し、自主的に環境影響評価を実施することとし、環境調査計画立案の段階から 専門家や行政機関の助言を頂き、環境影響評価及び保全策等を報告書に取りまとめております (平成20年3月取りまとめ)。

今回、平成24年度の「環境監視」結果について報告するとともに、併せて実施した環境保全への取り組みについてご報告させて頂きます。

### 「環境監視」結果

#### 1. 概要

表1に示すとおり、水質・陸生生物・生態系について工事中の環境監視を実施しま した。

X. XXIIIX				
区 分	工事中	供用開始後		
道路交通騒音	0	_		
道路交通振動	0	_		
水質	0			
陸生生物	0	0		
生態系	0	0		

表1 環境監視項目

その結果、工事車両による騒音・振動の影響や、土砂の流出による河川の水質の 変化は確認されませんでした。

また、工事エリア周辺を踏査したところ、動物の生息基盤となる植生の変化も確認されませんでした。

以上のことから、周辺環境への影響はほとんどないものと推察されました。

#### 2. 項目別の結果

#### (1)道路交通騒音

工事用車両の主要な通行ルートにおける平日昼間の道路交通騒音レベルは、58~69 デシベルであり、騒音の影響はほとんどないことが確認されました(表2 参照)。

注)「リサイクル燃料備蓄センター建設に係る環境影響評価 報告書(概要)について 平成20年3月」より抜粋

#### (2)道路交通振動

工事用車両の主要な通行ルートにおける平日昼間の道路交通振動 レベルは、<30(測定下限値) $\sim40$  デシベルであり、振動の影響はほとん どないことが確認されました(表2参照)。

項目	環境影響評価 予測値	環境監視 測定値	規準値等
交通量: 全体車両のうち 工事用車両の占 める割合(%)	0.6~2.7 (国道 279 号)	0.1~5.6 (国道 279 号)	_
騒音(デシベル)	63~72	58~69	70以下(環境基準/適用されていない) 75以下(要請限度/適用されていない)
振動 (デシベル)	31~41	<30∼40	70以下(要請限度/適用されていない)

表2 交通量、騒音、振動の環境監視調査結果

- 注1) 環境基準とは、環境基本法で規定されており、人の健康を保護し、生活環境を保全するうえで維持されることが望ましい環境上の条件について、具体的に設定された基準です。人の健康や生活環境を保全し、維持するための最低限度としてではなく、国や自治体として維持されることが望ましい政策目標として、その確保を図っていこうとするものです。
- 注2) 要請限度とは、騒音規制法、振動規制法に基づき定められた自動車から発生する騒音・振動の許容限度です。自動 車から発生する騒音・振動がこの許容限度を超え、道路周辺の生活環境が著しく損なわれていると認められる場合 は、市長村長が都道府県公安委員会に対して対策の要請を行なうことができるとされています。
- 注3) 交通量、騒音、振動の予測値は、平日の昼間の値です。
- 注4) 騒音、振動は、指定地域及び規制地域に該当しないことから、基準の適用外です。
- 注5) 騒音の予測値が70デシベルを超えている地点は、1地点だけで72デシベルでした。この地点は対象事業実施区域内に位置し、周辺には民家はなく、影響はほとんどないものと評価しております。

#### (3)水質

工事中の排水を放流している河川における浮遊物質量は、工事エリアの上流側、下流側ともに、雨が降ると一時的に高濃度となりますが、通常は10mg/0以下で推移しており、排水による影響はほとんどないことが確認されました。

#### (4)陸生生物

#### 1)動物

準備工事エリア周辺では、重要な昆虫類であるマイコアカネ・ゴマシジミ等の 生息が、調査時と同様に確認されました。一般種では、アジアイトトンボ・オオルリ ボシヤンマ・ナツアカネ・アキアカネ・ノシメトンボ・イチモンジセセリ・モンキチョウ・ ミドリヒョウモン・ウラギンヒョウモン・クジャクチョウ等も確認されました。

また、準備工事エリア周辺の植生変化や、美付川の水辺環境にもほとんど変化がないことから、動物の生息環境に変化はないものと推察されました。

このように、準備工事エリア周辺で保全対象種の生息状況やその生息環境が 良好に保たれていることは、環境保全措置の一環として進めているビオトープづくりにも、重要なことと考えております。





周辺地域で確認された重要な昆虫類

左:マイコアカネ 右:ゴマシジミ

#### 2)植物

工事エリア内に生育が確認され、平成 19 年に移植したノダイオウ・ミチノクサイシン・ノウルシ・オオニガナ及び平成 20 年に移植したエビネの合計5種の重要な植物については、良好な生育が確認されました。

ノダイオウは、移植した株も種子から育てた株も、開花・結実ともに良好でした。 ミチノクサイシンは、移植先で生育範囲を広げているのが確認されました。 ノウルシは、年々、株の大型化、開花数の増大がみられています。

オオニガナは、これまでで最も開花が多く観察されました。これは、移植した株から種子が周辺に飛んで増えた株でも開花がみられるようになったためで、定期的に草刈りをしているビオトープ内の歩道や水路脇で開花が目立ちました。

エビネも、順調に開花がみられました。



ノダイオウ(種子)



ノウルシ(種子)







ミチノクサイシン

エビネ

オオニガナ

#### (5)生態系

周辺を踏査したところ、動物の生息基盤となる植生の変化がなかったことから、生態系への影響はほとんどないものと推察されました。

## その他の環境保全への取り組み

#### 1. ミズナラ林の復元

#### (1)草本類による法面の早期緑化

現地で採取した草本類の種子が入った植生マットを、平成 21 年春に切土法面に 敷設して4シーズンが経過しました。

1シーズン目にはコブナグサやキンエノコロなどの一年生草本、2シーズン目からは越年生草本のコウゾリナ、3シーズン目にはエゾミソハギ、アカバナなどの多年生草本の花も目立つようになるなど、植生マットに入れた草本類が当初の予想通り順調に生育してきました。

一方、3シーズン目からは周辺部から飛来した種子によってオノエヤナギ、オオヨモギ、ブタナ、フキなど、好ましくない種類も増えてきており、これらの種類については、4シーズン目の今年度も除根するなどの管理を行い、繁茂防止に努めました。

#### (2)ミズナラ林を構成する木本類の植栽

現地において種子を採取して育てたミズナラ林を構成する木本類の苗木(ミズナラ・クリ・ホオノキ・ウワミズザクラ・ガマズミなど)を、平成22年春に植栽しました。

3シーズン目の今年度は、2シーズン目の冬の近年稀にみる豪雪の影響で一部 に枯損がみられましたが、大方は影響から持ち直しているのが確認されました。



法面に植栽したミズナラ (植栽後3シーズン目の状況)



法面に植栽したトチノキ (植栽後3シーズン目の状況)

#### 2. ビオトープの整備

ビオトープ整備に向けて、現地の水 みちを活かした小さな池と水路を作っ てから4年が経ちました。

ビオトープエリアでは、水辺や草地 を好む昆虫類の種数が年々増加して きていますが、今年度は新たにルリイト トンボ(重要な種)が観察されました。

重要な昆虫類を含む多くの昆虫類で交尾・産卵などの繁殖行動や幼虫・



ビオトープの状況

羽化も観察され、種数だけでなく個体数も増え、ビオトープに定着し、世代交代を繰り返している様子がうかがわれました。

また、重要な植物であるイトモ・タヌキモ類・イチョウウキゴケなども造成池や水路で変わらず生育が観察されました。

多くの動物類にとって、より好適な環境となるように、重要な植物種やチョウ類等の 食草・吸蜜植物の周囲では手刈りによる選択刈りを行ったり、歩道や水路沿いでは肩 掛け式草刈り機による機械刈りを行うなど、順応的な整備を継続して進めています。



イトモ(重要な植物)



ルリイトトンボ(重要な昆虫類)



オオルリハムシ(重要な昆虫類)の交尾と幼虫



ウラギンヒョウモンの産 卵



クロスジギンヤンマの羽化